

短期大学における目的別英語教育（3）： 福祉学科「英語」の授業計画と運営

English for Specific Purposes in College（3）： Planning and Conducting Class Activities in ‘English’ for Social Care and Welfare Major Students

望月 健一

MOCHIZUKI Ken-ichi

（承前）

1. 富山短期大学福祉学科英語カリキュラムの沿革

（1）では富山短期大学幼児教育学科、（2）では食物栄養学科及び専攻科食物栄養専攻におけるESP（English for Specific Purposes）について考察を加えたが、本稿では、福祉学科の「英語」（演習1年次前期選択科目）を採り上げる。

1996年4月に開設された福祉学科において、「英語I・II」（演習）は他の3学科と同様、必修科目であり、Iは1年次前期開講1単位、IIは1年次後期開講1単位であった。授業は週1回2時間（1コマ）で、履修者全員にとってこの授業が在学中唯一の英語の授業であった。開設当初より福祉学科の英語は、ESPとEGP（English for General Purposes）の二本立てであった。筆者が兼担教員として単独で全2クラスの授業を担当したが、1クラスのサイズが45～50名と英語科目としては大所帯であったこともあり、テレビ・ニュース等のリスニングと福祉の分野のリーディングを中心に授業を行っていた。基本的には、前者はEGP、後者はESPの授業内容であるが、テレビ・ニュース教材には福祉関係のトピックをできるだけ多く採り入れるようにしていた。

しかし、保育士資格・幼稚園教諭免許取得のために英語が必要な幼児教育学科、あるいは最先端の研究を知るために英語の論文に接する必要がある専攻科食物栄養専攻とは違って、福祉の資格取得のために直接英語は必要ではない。また、外国人居住者の少ない地域的特性、10年以上も英語に接していない社会人学生や英語が不得意な学生が多いこともあって、2014年度より「英語」は1年次前期のみの開講となった。この時期の1クラスのサイズは15～20名と理想的であったが、入学者の英語の学力・学習意欲の多様化が進み、授業運営がかなり困難になっていた。全15回の授業のうち7回を英語のネイティブ・スピーカーの教員がEGP、残りの8回を筆者がESPの部分を担当した。

さらには、2016年度のカリキュラム改正により専門科目が大幅に増加し、学生の負担を軽減するために「英語」は選択科目となった。シラバスは、前半の7回はネイティブ・

スピーカーの教員による EGP、後半の 8 回は筆者が担当する ESP という授業の流れが定着し、現在に至っている。過去 2 年間の履修人数は、34、35 名中 9 名である。

2. 福祉の分野の ESP

2.1. 福祉の分野の仕事

本学福祉学科の卒業生のほとんどは、特別養護老人ホーム、障害者支援施設、医療機関、グループホーム・その他の施設等に就職する。

福祉の分野の仕事は、基本的には対人援助サービスであり、その対象は高齢者、障害者・障害児、児童、その他、生活困窮者である。また、仕事の種類は、1. 介護（ケアワーク）、2. 保育、3. 相談援助、4. 看護・リハビリテーション、5. 栄養・調理、6. 運営・管理の 6 系統に分類することができる。¹

2.2. 福祉の分野のコーパス

上記の理由により、短期大学において福祉を専攻する学生を対象とする ESP の下位区分は、保育・幼児教育専攻の場合と同様、EOP (English for Occupational Purposes) [職業目的のための英語] 中の EPP (English for Professional Purpose) [職業専門家のための英語] ということになる。² 従って、“welfare” (「福祉」) から始まって、“the elderly” (「お年寄り」)、“the aging society” (「高齢化社会」) “life expectancy” (「平均余命」) 等、基本的な語あるいは語句から学習を始める。一口に福祉と言っても介護福祉、社会福祉、公共福祉、子ども福祉、医療福祉等、様々な分野があるが、本学福祉学科の場合、授業時間数が 1 年前期 15 回 30 時間と非常に限られているので、特に介護福祉の分野のコーパス (corpus)³ を中心に授業計画を立てている。“care-giver” (「介護者」)、“(certified) care-worker” (「介護福祉士」)、“home care” (「在宅介護」)、“nursing facility” (「介護施設」)、“wheelchair” (「車椅子」)、“dementia” (「認知症」) 等の語彙が学習内容に含まれるように教材を選択あるいは作成している。

2.3. 実践力・応用力を身につけさせることを目指す ESP 教育

ESP 教育の使命は、特定の専門分野のコーパスを確認することに留まらない。当然、その分野で頻繁に使用される語彙や慣用的な表現を学習者に定着させ、それらを前後関係の中で理解し、かつ運用する能力を身につけさせることが含まれる。従って、授業の後半では、施設や病院における会話文及び福祉の分野の新聞記事やエッセイ等に接する機会を与える。特に後者に関しては、ごく限られた時間の中ではあるが、読んだ内容に関して自分の感想や意見を自由に述べさせることによって、ある程度批判的 (critical) に英文を読む能力や英作文の力を身につけさせる試みを行っている。

3. 介護福祉士のための英語教育のニーズ

3.1. ニーズ分析トライアングル

(2) で述べたように、ウェスト (1994) は、ESP 教育における「ニーズ分析トラ

イアングル」(needs analysis triangle)として、1. 教師が認識するニーズ、2. 学習者が認識するニーズ、3. 職場やスポンサーが認識するニーズ を挙げている。⁴ ここではまず、基本的にこれらの3つの観点から福祉の分野の英語教育のニーズについて考えておきたい。ただし、(2)の場合と同様、「3. 職場やスポンサーが認識するニーズ」は「職場や社会におけるニーズ」と捉え直して考察を加えることにする。

3.2. 教師が認識するニーズ

筆者の知る限りでは、全国レベルで福祉の分野における英語教育のニーズ分析を行った研究は存在しない。

福祉の分野の専門教員が英語教育をどの程度重視しているかは、その大学・短期大学の教育目標やカリキュラムを調査することによって、ある程度判断することが可能である。都市部及びその周辺にある四年制大学の福祉関係の学部では、外国語教育が重要視されている場合が多いように見受けられる。例えば、城西国際大学福祉総合学部は、ディプロマ・ポリシーの一つに「ローカル、グローバルな視野に立ち、国境や文化の境を越えて対応できる能力を有し、孤立や排除のない社会づくりに貢献できる」ことを掲げており⁵、「Fundamentals of English I・II」、「Oral Fluency I・II」、「Communication for Community Work」、「福祉グローバル研修」といった英語科目を置いている。⁶ また、関西学院大学人間福祉学部では、1、2年次に必修で「英語講読」、「英語表現」が設置されており、3つの能力別クラスに分けて授業が行われている。⁷ 川崎医療福祉大学医療福祉学部では、1991年からESPの授業が行われている。⁸ 同学部ではその後、3年次のEOPの授業（ビジネス英語）が必修になり、能力別クラスによる授業が行われるようになった。⁹

その一方で、地方のある福祉系の短期大学は、外国語科目の単位を全く取得せずに卒業することが可能である。また、本学福祉学科では前述の通り、開設当初、通年必修で英語科目が置かれていたが、その後1年次前期のみの開講となり、現在は選択科目となっている。こうした一連の英語カリキュラム軽量化の動きの背景には、日本語による専門科目を充実させることに比べれば外国語教育は重要ではないと考える専門教員の共通認識があった。筆者はこの学科の兼任教員であるが、科内会議での発言権はなく、この二回に渡る英語カリキュラム改定を受け入れざるを得ない立場にあった。

以上、エビデンスとしては必ずしも十分ではないが、福祉の分野に関しては、大学・短大によって英語教育に関してかなり温度差があるのが現状である。その原因としては、例えば、介護福祉士の資格取得のための必要条件になっている等の道具的動機づけ

(instrumental motivation)¹⁰ が欠落していること、関東や関西等の都市部とそれ以外の地域とでは、外国語のニーズに大きな差があること等が挙げられる。

3.3. 学習者が認識するニーズ

前項で触れた関西学院大学人間福祉学部1年生を対象に行われた英語カリキュラムのニーズ分析のアンケート調査¹¹によれば、問12「私は英語の勉強がしたい」に対す

る回答は、1「全くそう思わない」4.5%、2「あまりそう思わない」7.9%、3「どちらかというと思わない」6.6%、4「どちらとも言えない」9.1%、5「どちらかというと思おう」29.8%、6「かなりそう思う」21.5%、7「非常にそう思う」18.6%、8「判断できない」0%であった。5～7を合計すると、英語を勉強したいと思っている学生は全体の69.9%である。これに対して、問13「私は英語の勉強をする必要がある」に対する回答は、1「全くそう思わない」0.4%、2「あまりそう思わない」4.5%、3「どちらかというと思わない」5.4%、4「どちらとも言えない」8.3%、5「どちらかというと思おう」24.4%、6「かなりそう思う」23.1%、7「非常にそう思う」33.1%、8「判断できない」0%であり、これも5～7を合計すると、英語を勉強する必要があると思っている学生は全体の80.6%にも達していることがわかる。当然の結果かもしれないが、自分が英語を勉強したいからという理由よりも、英語を勉強する必要があるからという理由で勉強する学生の方が多いたことが明らかである。

次に、城西国際大学福祉総合学部で実施された「英語学習に関する現状調査」の結果の一部を紹介する。¹² 質問項目は、5「そう思う」、4「ややそう思う」、3「どちらともいえない」、2「あまりそう思わない」、1「そう思わない」の5件法で集計されているが、質問項目2「英語を使った職業に就きたい」の平均値が2.04であるのに対し、質問項目8「これから福祉の仕事でも英語が必要になると思う」の平均値は3.69であった。このことは、被験者である学生が「自分の英語力の現状に関してはあまり自信がないが、将来は英語も必要と認識しており、英語を話せるようになりたいと強く考えている」ことを意味している。

最後に、アンケートの種類も質問の仕方も全く異なるが、本学福祉学科「英語」の「授業アンケート」結果に考察を加えることにする。前述の通り、この授業は全15回のうちネイティブ・スピーカーの教員が前半7回を担当し、筆者が後半の8回を担当している。従って、「授業アンケート」結果は2名の教員の授業に対する総合評価である。

まず、2017年度前期に実施した「英語」の「授業アンケート」で得られた回答より、問4(2)「授業の内容・方法は、将来の職業に関連する知識や技能・技術を獲得する上で役立った。」及び、問5「あなたにとって、この授業は、総合的にみて良かったと思いますか。」の2つの設問に絞って、回答の集計結果を分析する。回答者は、履修者9名中6名である。まず、問4(2)の集計結果は、A「大変役立った」16.7%(1名)、B「いづらか役立った」50.0%(3名)、C「どちらともいえない」33.3%(2名)、D「あまり役立たなかった」0%(0名)、E「まったく役立たなかった」0%(0名)であった。履修者の半数以上がこの授業が将来役に立つと考えており、役に立たないと考えている学生は一人もいないことが明らかである。また、問5に関しては、A「大変良かった」16.7%(1名)、B「良かった」16.7%(1名)、C「どちらともいえない」33.3%(2名)、D「良くなかった」33.3%(2名)、E「まったく良くなかった」0%(0名)との回答が得られた。

次に、2016 年度前期に実施した「授業アンケート」では、9 名全員が回答した。集計結果は、A「大変役立った」11.1%（1 名）、B「いづらか役立った」44.4%（4 名）、C「どちらともいえない」44.4%（4 名）、D「あまり役立たなかった」0%（0 名）、E「まったく役立たなかった」0%（0 名）であった。履修者の半数以上が英語の授業が将来役に立つと考えており、役に立たないと考えている学生は一人もいない。但し、C「どちらともいえない」を選んだ学生の割合が比較的高いことも、決して看過すべきではない。また、問 5 の結果は、A「大変良かった」11.1%、B「良かった」44.4%、C「どちらともいえない」44.4%、D「良くなかった」0%、E「まったく良くなかった」0%であった。

いずれの年度も回答者数が大変少なく、データとしては不完全ではあるが、英語科目の「授業アンケート」の集計結果から判断する限りにおいては、本学福祉学科の学生の場合には、「英語」を選択する学生にとっては福祉の EOP のニーズはある程度高いものと考えられる。

3.4. 職場や社会におけるニーズ

はじめに、現在、福祉の分野の多くの人々が関心を寄せていることの一つに、2020 年の東京パラリンピックが挙げられる。前項で引用した『城西国際大学紀要』所収の論文「福祉総合学部における英語教育の強化に関する予備的研究－英語教育の現状分析と保育英語導入の検討－」より冒頭の部分の一部を引用する：「日本国内の地域社会においても多文化化、多言語化が進行しており、福祉従事者が支援を必要とする人々にアクセスし、ニーズを把握するにあたって、共通語としての英語の運用能力の必要性が増大することが予想される。なかでも、2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックでは、選手やスタッフ、観客など様々な立場で、多くの障がいをもった人たちが世界中から集結する。そのことを考えると、外国語ができ、なおかつ福祉の専門的な知識・技術を習得した人材が必要となる。」¹³ 現在、全国の福祉関係の大学・短期大学の学部・学科で学んでいる学生の多くが、東京パラリンピックに直接的・間接的に関わる仕事に就く、あるいはボランティア活動に参加する可能性も大きい。

しかし、日本国内の福祉の現場において、今、それよりさらに直接的で大きな変化が起ころうとしている。外国人介護福祉士候補者の受け入れが開始したことである。厚生労働省によれば、日・インドネシア経済連携協定に基づき 2008 年度から、日・フィリピン経済連携協定に基づき 2009 年度から、日・ベトナム経済連携協定に基づく交換公文に基づき 2014 年度から、年度ごとに外国人看護師・介護福祉士候補者（外国人候補者）の受け入れを実施してきており、累計受け入れ人数は 2017 年 9 月 1 日現在、3 国併せて 4,700 人を超えている。ただし、これら 3 国からの受け入れは、看護・介護分野の労働力不足への対応として行うものではなく、相手国からの強い要望に基づき交渉した結果、経済活動の強化の観点から、経済連携協定（EPA）に基づき、実施するものである。公正かつ中立に斡旋を行い、適正な受け入れを実施するために、国際厚生事業団

（JICWELS）が唯一の受け入れ調整機関と定められ、これ以外の業者に外国人候補者の斡旋を依頼することは許可されていない。¹⁴

これにより、今後、日本国内の福祉関係の職場にアジアの国々から多くの外国人が採用されることが見込まれる。従って、これからの日本の福祉の現場の職員は、職場の同僚として福祉の分野のトピックだけではなく身の回りの事柄について彼らとコミュニケーションを図ることが必要になってくることが予想される。

以上の理由により、今、日本の福祉関係の大学・短期大学の学部・学科においては、英語や異文化理解のためのカリキュラムの整備が急務となっている。さらに、もう一言付け加えるならば、インドネシア、フィリピン、ベトナム、日本の四カ国を結ぶコミュニケーションの最上のツールは、英語に他ならない。

4. ESPとEGPが混在するシラバス

4.1. 福祉の分野におけるEGP

本学福祉学科の学生は、入学当初よりほぼ全員が介護福祉士の資格を取得し、職業専門家になることを目指している。従って、前にも述べたように、必要とされるESP (English for Specific Purposes) の下位区分は、EOP (English for Occupational Purposes) の中のEPP (English for Professional Purpose) である。

次にEGP (English for General Purposes) [一般的な目的のための英語] であるが、本学福祉学科の学生の場合、以下の三つの理由により、本学幼児教育学科の学生以上にEGPの学習が必要と考えられる。第一に、福祉の現場は対一のコミュニケーションを基本としている。介護福祉士と施設利用者との会話で使用される語彙・表現には、医療関係等の専門用語よりも通常の大人の会話で使用されるものはるかに多いことが想定される。第二に、国の政策により、今後日本国内の福祉関係の職場にインドネシア、フィリピン及びベトナムから多くの職員が採用されることが見込まれる。従って、これからの日本の福祉の現場の職員は、職場の同僚として幅広い分野のトピックにおいて彼らとコミュニケーションを図ることが必要である。第三に、本学福祉学科は、近年入学者の英語の学力・学習意欲が多様化している。特に社会人入学者の中には、長年英語から遠ざかっていた者も少なくない。従って、ESPの学習以前にEGPの学習で基礎を固めておくことが必要である。

4.2. ESPとEGPが混在する海外のシラバスの実例

ここで、ESPとEGPが混在するシラバスの実例として、サウジアラビア王国キング・ファイザル大学 (King Faisal University, Dammam, Saudi Arabia) の CSE KFU Programme を紹介する。¹⁵ CSEはBritish CouncilのCommunication Skills in English Programmeの頭文字、KFUはKing Faisal Universityの頭文字である。これは、医学の分野のESPであり、Intensive Course Stage I, II, IIIの3つのコースから成る。EGPに対するESPの割合は、それぞれ、Intensive Course Stage I : 50%、Intensive Course Stage II : 70%、Intensive Course Stage III : 85%と、学習が進むにつれてESPのパーセンテージが高くなっている。ただし、週あたりの授業時間数は、I :

27 時間、II : 16 時間、III : 7 時間と少なくなっていく。このプログラムでは、一部英語教員と専門教員によるティーム・ティーチングが採り入れられているが、スタッフの関係上、女子のクラスではこれは実施されなかったという。ESP と EGP が混在するシラバスであるのは、学習者の学力・学習意欲が必ずしも高くないことが、その理由のようである。専門分野は違うものの、この点は本学福祉学科の英語カリキュラムを考案する上で大いに参考になる。例えば、Intensive Course Stage I の内容は以下の通りである。なお、この論文において、EGP は GE (General English) と表記されている。

[表 1] : Syllabus Components of CSE KFU Programme – Stage I¹⁶

Component	Language Bias	Weekly Hours	Team Taught
Nucleus	ESP	5	✓
Language of Maths	ESP	4	×
Lexis	ESP	3	×
SRA Reading Laboratory	GE	3	×
Language Laboratory	GE	5	×
Video	GE/ESP	4	×
		—	
		7	ESP C. 50%

ESP に関しては、Nucleus (基礎)、Language of Maths (数学の言語)、Lexis (語彙) 等、言語としてあまり複雑でない学習内容から始め、SRA Reading のように言語の大きなかたまりを扱うものは GE、Language Laboratory、Video 等、言語の音声面に関しては GE あるいは GE と ESP の混合と、学習内容によって ESP と GE の振り分けが注意深く行われている点も大変参考になる。

5. 本学福祉学科 1 年生の英語運用能力

本学福祉学科は、近年において入学者の学力に大きな差が見られるようになった。そこで、学生の英語力を正確に把握するために(1)で採り上げた本学幼児教育学科、(2)で採り上げた本学食物栄養学科と同様に、1 年次に英検準 2 級一次試験問題を使って英語実力診断テストを行った。受験者数は 9 名である。

まず、総点の平均は、35.56 点 (47.71%) であった。この問題の合格点は 44 点なので、9 名中 2 名が英検準 2 級一次試験の合格圏内に入ったことになる。セクション別に見ると、筆記試験の総点に大きなばらつきが見られた。「短文空所補充」は、20 点満点中 13 点が最高点である。語彙、イディオム、文法に関する知識を十分に身に付けている学生はいないようである。それに続く、「会話文」、「作文」(語句整序問題)、「長文問題」のセクションでは、それぞれ、0 点あるいは 1 点の学生から満点かそれに近い学生

まで、大きく点数差が開いている。一方、リスニングでは、全員が 9～20 点の範囲内に収まっており、あまり大きな差は見られない。このことは、英語を聞いて全く理解できない学生はいないが、逆に大体理解できる学生もいないことを示している。

[表 2] 福祉学科 1 年生の英語実力診断テスト結果 (受験者数 9 名)

2017. 6.

	短文空所補充	会話文	作文	長文	筆記小計	リスニング	合計
配点	20	8	5	12	45	30	75
平均点	9.67 (48.35%)	3.67 (45.87%)	2.33 (46.67%)	6 (50.00%)	21.67 (48.16%)	13.89 (46.30%)	35.56 (47.41%)
最高点	13	7	4	12	34	23	53
最低点	4	1	0	1	10	6	19

この英語実力診断テストの結果、今年度の学生の中には、基本的な語彙、イディオム、文法(特に文構造の把握)が苦手な者が多いことが明らかになった。そこで対策として、①同義語、反対語、よく使われる類似した表現、イディオム等を紹介しながら、英語の語彙や表現に関する知識を増やしていくこと、②会話表現の知識を増やすこと、③英語の五文型等、文の構造に対する理解を確認しながら授業を進めることを重点項目とした。

6. 福祉学科「英語」の授業計画と運営

6.1. 教材選択と授業計画立案

この授業の学習目標は、以下の 2 点である。

- ①「総合的な英語力の向上を目指す。主に福祉の分野で使われる表現を学ぶ。」
- ②「語彙と文法力を伸ばすことに重点を置く。」

また、「学修成果」(学生が獲得すべき具体的な成果)として、次の 2 項目を掲げている。

LO-1【知識・理解】英語の基本的な語彙と文法を修得している。また、日常生活や福祉の分野のトピックを通して、日本と外国の文化について理解している。

LO-4【関心・意欲・態度】日常生活や福祉の分野のトピックに関心を持つことができる。¹⁷

教材に関しては、現在、英語教材、新聞記事、エッセイ、及び担当教員が「学内で」(in-house)作成したものを組み合わせて使用している。今年度の 15 回の授業スケジュールは、次の通りである。

[表 3] 2017 年度 福祉学科「英語」講義概要

回	授 業 内 容
1	Introduction: what do you do? (イントロダクション あなたは、どんなことをしていますか?)
2	What do you do? cont./pair interviews (あなたは、どんなことをしていますか?二人ずつペアになってインタビュー)
3	How often do you.....? (あなたは、・・・[週に] どれくらいやっていますか?)
4	Talking about likes and dislikes (好きなこと、嫌いなことについて)
5	Where were you? (以前は、どこで何をしていましたか?)
6	Review and activities (復習、教室内の活動)
7	Final test (最終試験)
8	福祉の分野で使用する語彙(1) : Parts of the Body (人体各部位)
9	Japan needs more nurses and care-workers (日本には、もっと看護師と介護福祉士が必要) / A middle-aged nurse is talking to Ms. Hara, a 75 year-old patient. (中年の看護師が 75 歳の患者、原さんに話しかける)
10	English Proverbs (英語のことわざ) / 福祉の分野で使用する語彙(2) : 老年期に関する表現
11	Adult Diapers Outsell Baby Diapers(1) (大人用おむつ、赤ちゃん用おむつの売り上げを上回る) 精読
12	Adult Diapers Outsell Baby Diapers(2) (大人用おむつ、赤ちゃん用おむつの売り上げを上回る) 精読及びディスカッション / Late Adulthood (1) (高齢者) 精読
13	Late Adulthood(2) (高齢者) 精読及びディスカッション
14	Humanitude(1) (ユマニチュード) 精読
15	Humanitude(2) (ユマニチュード) 精読及びディスカッション Towards a More Inclusive Society (より包括的な社会を目指して)
16	最終試験

それでは次に、授業の活動内容と運営方法を、教室での学生の反応や「授業評価アンケート」への回答を交えながら解説する。

6.2. 教室における活動

(1) 日常生活のトピックでコミュニケーション

全 15 回のうち前半の 7 回は、EGP の授業である。英語のネイティブ・スピーカー教員が担当し、授業はすべて英語で行われる。

学生は、日常生活の中から自由にトピックを選び、コミュニケーション活動を行う。自分が今やっていること、好きなことや嫌いなこと等について話しながら語彙を増やしていく。基本的には自分のことを話すので、新学期の始めにクラスメートと親睦を深めるよい機会にもなっている。必修科目であった時期の最後の数年間は、学生の英語の学力・学習意欲の個人差が大きく、中には、ネイティブ・スピーカーの教員に面と向かって日本語で「私、英語大嫌い」と宣言する学生もいた。しかし、選択科目になってからは例年、履修者全員がほぼ皆出席であり、英語が苦手な学生はいるものの、大変良い学習環境が保たれているとのことである。2017年度「授業アンケート」自由記述欄には、「積極的に話そうというところもあり、ちゃんと理解できるか不安でしたが、楽しかったです」との書き込みがあった。また、2016年度「授業アンケート」では「日常で使う英語を学べて良かった」との記述があった。

前述のように、福祉の職場の仕事は基本的には対人援助サービスである。たとえ日常生活の中のトピックであっても、一対一、あるいは少人数によるコミュニケーション活動は、福祉の現場に必要な対人関係能力を育てる上で大変有益と考えられる。

(2) 福祉の分野で使用する語彙

第8回以降は、筆者が担当するESPの授業である。第8回、第10回は、福祉の分野で使用する語彙を扱う。

第8回の授業では、人体各部位 (Parts of the Body) に関する表現を採り上げる。人体各部位の名称の知識は、例えば、施設利用者が体の不具合を話題にする場面、あるいはリハビリテーションを行なう場面等で役に立つと考えられる。まず、人体の絵に体の各部位の英語の名称を入れたプリントを用意する。はじめに体の部位の名称の一部を空欄にしておいて、その名称を当てさせる。プリントが完成したところで、“head”(「頭」)、“shoulder”(「肩」)等の名称を絵で確認しながら、順に発音練習を行う。“hip”(「尻・臀部」)から“knee”(「膝」)までは“thigh”(「太もも・大腿部」)、“knee”から下は“leg”(「脚」)と呼ぶ等、正しい知識が身につくよう確認しながら授業を進める。また、“stomach”(「胃」)や“belly”(「腹」)以外に“abdomen”という医学用語がある等、同じ部位の異なる名称に関する知識も提供しておきたい。一通り学習が終わったら、今度は全員起立して、教員が指差した体の部位の名称を学生が英語で答える。あるいは逆に、教員が発音した体の部位の名称に相当する自分の体の部分を指差す。脳の活性化を促し、学習内容をより確実に定着させることも、この活動のねらいの一つである。

なお、福祉の隣接分野である医学のESPにおいては、身体に関する語彙・表現は最初に学ばなければならない重要学習事項の一つであり、人体解剖図を使って、さらに詳細で専門的な知識を身につけることが求められる。

第10回は、老年期に関する表現を学習する。ここでは、老年期に関する語句あるいは短い文を左右に英日対訳のかたちで並べ、英語または日本語の一部を空欄にしたプリントを用意する。教室では、解答を確認し、説明を加えながら対照表を完成させていく。

[表 4] 老齡期に関する表現

public assistance	(ア)
(イ) system	介護保険制度
People age 40 and over are required to pay a monthly premium.	40 歳以上の人は、毎月 (ウ) を払うように要求されている。
.....

解答は、(ア) 公的援助、(イ) nursing-care、(ウ) 保険料 である。予習復習の際には、必要に応じて現代用語辞典、福祉用語辞典も参照するように指導する。試験では、一部 () の位置を変えて出題するのも一つの方法である。

(3) 施設や病院での会話文

第 9 回の授業では、前半のネイティブ・スピーカーの教員による EGP の英会話の授業で学んだことを土台に、福祉の分野のトピックによる比較的平易な会話文に接する機会を提供する。一通り会話文の意味の確認を行った後、できるだけ生き生きとした会話になるように、ロールプレイングで音読の練習を行う。単語一つ一つの発音だけでなく、自然なイントネーションが身につくように指導する。

最初に採り上げる会話文は、“Japan needs more nurses and care-workers” (「日本には、もっと多くの看護師・介護福祉士が必要である」) である。ここでは、看護師・介護福祉士不足のため日本政府がインドネシアやフィリピンからの研修生の受け入れを決定したという最新のニュースが話題になっている。前半の部分を引用する。¹⁸

Rie: Did you know there is a shortage of nurses and care-workers in Japan?

Mai: No, I don't. Why is that?

Rie: Because it's a tough job with lots of stress. Nurses have to work nights and weekends.

Mai: What's the solution?

Rie: The government has invited nurses from other countries, such as Indonesia and the Philippines, to come to Japan as trainees.

Mai: That sounds like a good idea.

Rie: Yes, I agree with you. But the problem is foreign nurses have to pass a national test. It is in Japanese and really difficult for them.

.....

< 試訳 >

リエ：日本では、看護師や介護福祉士が不足しているって、知ってる？

マイ：いえ、知らないわ。それは、どうして？

リエ：それは、辛くてストレスの多い仕事だからよ。看護師さんは、夜も週末も働かなければならないの。

マイ：解決策は何？

リエ：政府は、インドネシア、フィリピンといった国々から看護師を招いているのよ。日本に来て研修生になれるようにしているの。

マイ：それは、いいアイデアだと思うわ。

リエ：私も、そう思うわ。でも問題は、外国人の看護師は国家試験に合格しなければならないの。試験は日本語で、とても難しいの。

.....

まず、音読の練習であるが、単語を一つずつポツポツ読む、あるいは単調で抑揚のない読み方で読むのではなく、文単位で、自然なイントネーションで読むように指導する。例えば、疑問文に関しては、1行目の“Did you know there is a shortage of nurses and care-workers in Japan?”は助動詞で始る疑問文なので文末を上げ調子で読むが、これに対して、2行目の“Why is that?”や5行目“What’s the solution?”は疑問詞で始まる疑問文なので、文末を下げ調子で読むように指導する。

この会話文を選んだ理由は、福祉の現場で役立つと考えられる表現が多く含まれていることである。例えば、3行目のリエのせりふ“it’s a tough job with lots of stress”は、わが国において福祉の仕事が敬遠される理由を端的に一言で述べたものである。“tough”が、日本語の「タフな」とは違って「辛い、苦しい、骨の折れる」という意味であることを確認しておきたい。“Nurses have to work nights and weekends”も忙しさをうまく表現したものである。“nights and weekends”が複数形になっていることにも注意を喚起したい。英作文で同じような表現が出てきた時に複数形が使えれば、英語がかなり上達した証拠である。“That sounds like a good idea.”や“I agree with you.”はE G Pの範疇に属するが、これも日常生活で頻繁に使用される重要な表現である。

次に“A middle-aged nurse is talking to Ms. Hara, a 75 year-old patient.”（「中年の看護師が75歳の患者、原さんに話しかける」）より、前半の部分を引用する。¹⁹

Nurse: My, you are looking fine this morning. You must be happy to be going home.

Ms. Hara: Pardon?

Nurse: Are you happy to be going home? Today? Happy?

Ms. Hara: Well, yes. I am looking forward to being in my home again. But I worry about falling down.

Nurse: You need to take things slowly. And rest. Don’t push yourself at first.

No full exertion for a while.

.....

< 試訳 >

看護師：まあ、今朝はとても元気そうね。お家に帰るのはうれしいでしょうね。

原さん：え？

看護師：お家に帰るのはうれしい？今日？うれしい？

原さん：まあ、そうね。自分の家に戻るのが楽しみだわ。でも、転倒しないかどうか心配なの。

看護師：何でも、ゆっくりするようにしたらいいわよ。そして、休憩をとることね。はじめは、無理しないで。しばらくは、頑張り過ぎないようにね。

.....

おそらく耳があまりよく聞こえず、“Pardon?” と聞き返す原さんに対して、看護師は “Are you happy to be going home?” と、言ったばかりの内容を簡略化した表現で繰り返した後、さらに駄目押しするかのよう “Today? Happy?” と要となる語を繰り返している。病院や施設では、患者や利用者に対して、短く分かりやすい表現に言い換えながら根気よく繰り返し言う場面が想定されるので、このように、やや特殊なコミュニケーションのサンプルに触れることも大変有益と考えられる。“fall down” や “take things slowly” も、覚えておくと現場でとても役に立つ表現である。

(4) リーディング

第 11、12 回の授業では、ニュース記事 “Adult Diapers Outsell Baby Diapers” (「大人用おむつ、赤ちゃん用おむつの売り上げを上回る」) を教材に使用した。²⁰ 「大人用のおむつ」「貧困高齢者」等、非常に身近な題材を扱った文章なので、読み終えた後にディスカッションを行った。以下、全文を引用する。

Adult diapers are set to outsell baby diapers in Japan by 2020 in just the latest example of the challenges facing a nation where more than 20 percent of the population are 65 and older.

The Nikkei newspaper reports that paper companies – Daido and Nippon Paper – are expanding their “incontinence products” manufacturing facilities in preparation for an expected surge in demand.

Quartz.com says the adult diaper market is growing by up to 10 percent year-on-year and rakes in \$1.4 billion per year. Adult diapers can go for as much as two and half times the price of baby diapers.

Japan has one of the fastest-aging populations in the industrialized world, and there are concerns about how elderly citizens relying on care will be cared for in the year ahead.

In a startling statistic reported by the Telegraph newspaper, nearly a quarter of all shoplifting arrests in Tokyo last year involved pensioners over the age of 65.

More than 3,320 pensioners were detained by police, eclipsing for the first time the number of teenagers detained in the same year (3,195)

About 70 percent of the thefts involved food, signaling the growing poverty amongst pensioners living alone in Tokyo.

< 試訳 >

日本では 2020 年までに大人のおむつの売り上げが赤ちゃんのおむつの売り上げを超える見込みですが、これは 65 歳以上の人が人口の 20% を超える国が直面している問題の一つです。

日経新聞の報告によれば、大王製紙や日本製紙といった製紙会社は需要の急増を予測して、「失禁製品」の製造機関を拡大しています。

Quartz.com によれば、大人のおむつの市場は毎年最大 10 ポイントの成長を遂げ、年間 14 億ドルの収入になります。大人のおむつを買うために、赤ちゃんのおむつの値段の 2 倍もの金額が支払われています。

日本は工業国の中で最も高齢化が進んでいる国の一つであり、介護に依存している高齢者が、これから先どのように介護されるのかが懸念されます。

テレグラフ紙が伝えた驚くべき統計によれば、昨年東京で万引きで逮捕された者の 1 / 4 近くが 65 歳を超える年金受給者でした。

3,320 人を超える年金受給者が警察によって拘留され、初めて同年拘留された十代の若者の数を上回りました (3,195 人)。

盗んだ物品の約 70 パーセントは食料品であり、東京で一人暮らしをする貧しい年金受給者が増えていることを示しています。

最初に、新聞記事の見出しには動詞は過去形ではなく現在形を使用する、冠詞は省略する、出来るだけ音節数の少ない短い語を使用する等のルールがあることを説明する。

“Adult diapers” 「大人のおむつ」、 “incontinence products” 「失禁用品」、 “pensioners” 「年金受給者」 は、ぜひ知っておきたい福祉の分野の語彙である。また、本文にはないが、この際 “disposable diaper” 「使い捨ておむつ、紙おむつ」、 “pension” 「年金」 等の語（句）も紹介する。第 3 パラグラフでは “. . . is growing by up to 10 percent year-on-year and rakes in \$1.4 billion per year. . . .”、あるいは “. . . as much as two

and half times the price of. . .”等、数字や倍数を扱った表現が理解できているかどうか、また正しく音読できるかどうか確認しておきたい。英文を音読していて、数字が出てくると日本語読みになってしまう学生が多いからである。また、同じパラグラフの“rake in”（「大金を稼ぐ」）、“go for”（「で売れる」）、第4パラグラフの“rely on”（「に依存する」）等のイディオム・口語表現も、辞書で意味と用法を確認しておく必要がある。

読み終えた後で、クラス全体でディスカッションの場を設けた。学生に対しては、事前に授業でディスカッションを行なう旨予告し、自分の意見を述べるための準備をしておくように指示しておいた。しかし、当日のディスカッションでは、英語運用能力の低い学生が多いことに配慮して、使用言語は日本語・英語のどちらでもよいことにした。この記事の内容について自由に感想・意見を述べてもらったところ、真っ先にA君が英語で次のような意見を述べた。

“I think Japan needs more care-workers and guardianships for the elderly. So government should build more welfare school and educate young people to care for the elderly.”（「ぼくは、日本には高齢者のためのもっと多くの介護福祉士や後見人が必要だと思います。だから、政府はもっと福祉関係の学校を増やし、高齢者のケアを行うように若者を教育すべきです。」）

ここでは、①高齢者のケアを行なう人員を増やすことと ②若者に高齢者のケアを行なうに教育すること の二つの提案が行われている。これらは、いずれも国の行政に関わる大きな問題であり、意識のレベルの高い発言と言える。

少し話がそれるが、この学生は教員がクラス全体に対して発問を行なうと真っ先に答えを言ってしまう傾向があるので、他の活動では、できるだけ多くの学生が発言できるように名列順にあてる、あるいはローテーションで違う列の学生達に問いかけるように工夫を行っている。

もちろん、日本語による発言も歓迎する。話す内容（コンテンツ）があるのは、大変いいことだからである。例えば、Bさんは、日本語で次のように述べた。

「65歳を超えた年金受給者が警察に拘留されるのは悲しいことだと思います。私達は、支援してあげるべきだと思います。例えば、話し相手になり、一人にしないことが大切です。」

とても優しく思いやりに満ちた発言である。この学生に対しては、本文で使われていない語彙・表現を中心に、必要に応じてサポートを行なう。「悲しい」、「支援を行なう」、「話し相手になる」、「一人にする」は英語でどう言うか、一つずつ本人あるいはクラス全体に問いかけながら、答えを出していく。次は、文構造である。主語を何で始めるか、

動詞はどのように置くか、代名詞に置き換えることができる語句はあるか等、ヒントを与えながら次第に英文を完成させていく。この場合、必要に応じてヒントを与える箇所は次の通りである：“I’m sad to hear that pensioners over 65 were detained by police. I think we must support them. For example, we should talk with them and not to leave them alone.”（ は語彙・イディオム、 は文構造に関わる部分である。）もちろん、できるだけ本人に答えさせ、支援は最低限に留める。

日本語で意見を述べた学生に対しては、語彙や文構造に関するヒントを与えながら発言した内容を少しずつ英語に直すように促し、やがて学生の口から出てくる完成した英文を板書、整理、あるいは図式化しながらディスカッションを進めていく。このように、学習のプロセスの要所において、学習者に対して「足場作り」(scaffolding)²¹を行うことは、ESP教育において重要なことと思われる。

最後の2回の授業では、「ユマニチュード」(humanitude)²²に関する記事を採用上げた。この文章は、『楽しい英語の世界へようこそ』(*Dear Class*)というタイトルのEGPの英語教材に収録されている。²³ このテキストでは、「クラゲ」、「働くロボット」、「ムーミン・ハウス・カフェ」等、様々なトピックが扱われている。このように、ある分野のESPのために有効な教材がEGPのテキストに収録されているケースも多い。

「ユマニチュード」は、フランスのイヴ・ジネスト (Yves Gineste) とロゼット・マレスコッティ (Rosette Marescotti) により創始された高齢者ケア技術である。150を超える具体的な技術が「人とは何か」という哲学に基づいて体系化されており、フランスでは現在400を超える医療機関・介護施設で導入され、国内に11の支部を持つ。現在日本ではジネスト・マレスコッティ研究所日本支部 (理事長：本田美和子氏) の設立準備が進んでいるという。²⁴ テキストより、Level 1のパラグラフを引用する。

Humanitude is a method of caring for people with dementia or other illnesses. That focuses on the patient. Humanitude stresses understanding, connecting emotionally, and behaving ethically toward others. In nursing care, humanitude concentrates on five principles: standing, eye contact, smiling, touch, and communication. For sick patients, it’s important to get them standing and walking as soon as possible to improve circulation. Warm visual eye contact attracts the patients’ attention and provides them with a sense of dignity. Smiling helps nervous patients feel at ease. Touch provides warmth, reassures, and comforts the sick. Communication can convey the hope of getting better, inform and encourage [patients]. Using these principles can improve patient care and inspire caregivers.

< 試訳 >

ユマニチュードは、認知症あるいはその他の病気の人々を介護する方法です。これは、患者に焦点が当てられます。ユマニチュードでは、理解、感情的につながることに、他者に対して道徳的に振る舞うことに重点が置かれます。介護において、ユマニチュードは5つの原理に専念します。即ち、立つこと、アイコンタクト、微笑むこと、触れること、そしてコミュニケーションです。病気の患者にとっては、血液循環を良くするために出来るだけ早い段階で立って歩くようにすることが重要です。温かいアイコンタクトは患者の注意を引きつけ、自尊心を与えてくれます。微笑むことは、神経質になっている患者をくつろいだ気分にならせてくれます。触れることは暖かさを与え、病人を安心させ、慰めてくれます。コミュニケーションは回復する望みを伝え、[患者に]情報を提供し、励ましてくれます。これらの原理を利用することによって、患者の介護を改善し、介護者に良い刺激を与えることができます。

1行目“dementia”(「認知症」)、2行目“patients”(「患者」)等は福祉の分野の最重要単語の部類に属するので、英文読解の前に発音指導を行う。前者は「デメンチア」、後者は「パティエント」等の発音にならないように指導する。

このパラグラフは、あまり難しい単語が使用されておらず、一つ一つの文の長さが短いため、初級用のリーディング教材に適している。また、たとえ「ユマニチュード」という名称を聞いたことがなくても、ここには“understanding”、“connecting emotionally”、“behaving ethically toward others”、“standing”、“eye contact”、“smiling”、“touch”、“communication”等、介護に必要な語彙が豊富に含まれている。第6文“Touch provides warmth, reassures, and comforts the sick.”では、“Touch”が主語、“provides”、“reassures”、“comforts”はその動詞、“reassures”、“comforts”の目的語が“the sick.”であることを確認しておきたい。

しかし、トピック選択の観点から言えば、本学福祉学科で「ユマニチュード」を選んだことは失敗であった。その理由は、その名称を聞いたことがある学生が一人もいなかったため、読後のディスカッションであまり意見が出なかったからである。NHKが採り上げ、日本語の入門書が出ており²⁵、一般的なトピックを扱った英語のリーディング教材にも載っているので適切な題材と判断したが、やはり、教材の選定にあたっては、実際に学生が履修する専門科目の学習内容の調査を行う必要があることを痛感した。

リーディングに関しては、2017年度「授業アンケート」自由記述欄には「後半の授業は、福祉関係の英文で良かった」、2016年度「授業アンケート」には、「二人の先生から本格的な英文を学ぶことができた」とのコメントがあった。普段の授業でも、福祉以外のトピックの英文を読みたいとの声は聞かれない。今後も、リーディングでは福祉に関する新しいニュース記事等を教材に活用していきたいと考えている。

(5) 国際シンボルマーク

「国際シンボルマーク」(ISA: International Symbol of Access) [「障害者のための国際シンボルマーク」と呼ぶこともある] は、障害をもつ人々が利用できる建築物や施設であることを示す世界共通のマークである。これらのマークの中には英語の文字や語句が入っているものもあるが、イラストのみのものが多い。そこで、それぞれのマークについての英語による簡単な説明文を用意し、クイズ感覚でマークと説明文をマッチングさせる活動を行う。



1



2



3



4

- (A) The symbol shows that the premises have a sign-language interpreter service available. (このマークは、この施設では手話通訳者のサービスを受けられることを意味している。)
- (B) The symbol shows that the premises have barrier-free access. (このマークは、この施設がバリアフリーであることを意味している。)
- (C) The symbol shows that any written material uses a large font for people with vision problems. (このマークは、目の不自由な人のためにすべての掲示物に大きな文字が使用されていることを意味している。)
- (D) The symbol shows that this telephone also has a keyboard for the hard of hearing. (このマークは、この電話には耳が不自由な人のためのキーボードがついていることを意味している。)

答えは、1 - (D)、2 - (C)、3 - (A)、4 - (B) である。授業では、ほとんどの学生が正解を選ぶことができた。シンボルマークの方はともかく、(A)~(D)の英文のおよその意味が分からないと正解は選べないので、これも立派な英語活動の一つである。

国際シンボルマークに関する知識が実社会において役立つことは言うまでもないが、それに加えて、この活動は学生に国際社会の一員であることの自覚を促すための一つの機会を提供するものであることを付け加えておきたい。

(6) 英語の諺

^{ことわざ}諺は万人の共通の話題であり、通常、英語の諺はE G Pに分類される。しかし、諺には人生における真実や教訓が込められていて、施設の利用者や人生経験の豊かな高齢

者の会話の材料として適切であること、また、脳トレのクイズ形式の問題にもよく使われていることから、福祉の分野のESPの一部として位置づけることも可能である。

英語の授業で諺を扱う際には、英語の諺に対応する日本語の諺を当てさせ（あるいは選択肢から選ばせ）、その後で解説を加える等の方法で授業を進めることが多い。しかし、日本語と英語の諺で、意味やニュアンスに微妙なずれがある場合には、特に慎重に説明を行う必要がある。ほんの一例を挙げるならば、「本末転倒（するなかれ）」に対応する英語の諺としてよく引き合いに出されるのが、“Don't put the cart before the horse.”である。しかし、この英語の諺の意味は「馬の前に荷馬車をつけるな」、つまり「物事の順序を誤ってはならない」である。これに対して、日本語の「本末転倒（するなかれ）」は、通常「重要でないことを重要なことより優先するな」つまり「物事の優先順位を誤るな」という意味で使われている。

また、特定することが可能なものに関しては、出典あるいは発祥の地（国）も押さえておきたい。例えば、「人間万事塞翁が馬」（“The ways of providence are inscrutable to man.”）は中国の「^{えなんじ}淮南子」に由来する。“Every failure is a stepping stone to success.”（「失敗は成功のもと」）の出典はイギリスのウィリアム・ホエイウェル（William Whewell, 1794-1866）の『イングランドの道徳教育の歴史に関する講義』第7講（*Lectures on the History of Moral Philosophy in England, Lecture 7, 1852*）である。ただし、後者に関しては、トーマス・エジソン、ヘンリー・フォード、ビル・ゲイツ等、古今東西の偉人が同じような意味の言葉を残している。また、“Fortune comes in by a merry gate.”は、日本語の「笑う門には福来たる」の英訳とされている。²⁶ 書き初めや年賀状にも使われる「笑門来福」は、その漢文風表記であって中国語ではない。

7. 福祉学科英語カリキュラムの今後の展望と提案

福祉の分野に関して、現在わが国は一つの転機を迎えているため、特にここで一つの提案を行なっておきたい。前述のように、今後日本の福祉の現場にアジアの国々から多くの職員が採用されることが見込まれる。これからの時代の福祉の現場の職員は日常的に彼らとコミュニケーションを図ることが必要になってくる。

以上の理由により、本学福祉学科の「英語」は必修科目に戻すことが望ましい。また、福祉の分野のESPをある程度修得するためには最低1年間の学習時間が必要である。さらには、英語の苦手な学生や長年英語から遠ざかっていた社会人の入学が多いことに鑑みて、「初級クラス」と「中級クラス」を設けることが望ましい。プレイスメントテストは実施するが、どちらのレベルのクラスを選択するかは最終的には学生本人の判断に委ねたい。何故なら、これには学習の「動機づけ」(motivation)の問題が絡んでおり、例えば英語運用能力は低くても意欲的な学生は「中級クラス」に入れた方が本人の将来のためになる可能性が高いからである。

一定の語学力は必要であるが、それ以上に大切なことは、異なる文化を知り、理解しようとする姿勢である。従って、教養科目として「英語」に加えて「異文化理解」「外国事情」等を設置することが望ましい。外国人に対する無関心、無理解は職場における円滑なコミュニケーションの妨げになり、最悪の場合には様々なトラブルを引き起こす原因となる可能性があるからである。

また、これは厚生労働省に対する提言であるが、介護福祉士等の資格取得要件に外国語、異文化理解、外国事情（特にアジア）関係の科目を含めることが望ましい。

8. まとめ

以上、本研究（1）～（3）を通して、筆者が専任教員として勤務する富山短期大学の幼児教育学科、食物栄養学科、専攻科食物栄養専攻、福祉学科のESPの授業計画、授業運営、教材選択等について考察を行った。

（1）で考察したように、保育・幼児教育の分野のESPは、基本的にはEOP〔職業目的のための英語〕の中のEPP〔職業専門家のための英語〕である。保育所、幼稚園、認定こども園の日常生活や各種行事、あるいは健康、人間関係、環境、言葉、表現（造形表現・音楽表現）の領域の基本的な語彙・表現がこの中に含まれる。特に日本語が通じない保護者とコミュニケーションをとるためには、外国語の運用能力が必要不可欠である。保育の分野のESPの学習形態としては、様々なグループ活動、例えば英語の歌を歌う活動や英語の絵本作り等が適している。そのような活動においては、グループ内でお互いに協力し補助し合うことによって「学習者相互の足場作り」(peer scaffolding)²⁷が行われる場合もある。栄養士や介護福祉士の場合と違って、保育士、幼稚園教諭免許取得のためには英語の単位が必要である。しかし、研究者になる等、一部の例外を除き、EAPは不要である。

（2）では、理系分野である食物栄養学のESPを扱った。この分野のESPは、EOPとEAPの両方にまたがっている。食品、食材の名称から調理学、栄養学、化学、医学に至るまで、幅広い分野のコーパスが守備範囲となる。また、食品に関するニュースや広告、料理のレシピ、調理方法や食文化を伝達するための会話、講演、論文など多様なジャンルが存在する。食品・食材の名称、食品ニュース、レシピ等はEOPやEGPの範疇内にあり、短大1，2年時に学習しておくことが望ましい。しかし、専攻科や四年制大学の高学年においては、最先端の研究成果を知るために英語で書かれた学術論文を読むため、EAPが必要である。理系の論文を読むためには、専門分野に関する知識以前にEGAP、例えば、グラフ、表、データを理解する能力や統計学に関する知識が欠かせない。また、食品成分の説明には化学のESAPも必要である。さらには、「食」と「医」は不可分の関係にあるため、医学のESAPも必要である。従って、食物栄養学の分野で最も必要な英語の技能は、語彙力と読解力である。

(3) [本稿] で考察したように、福祉を専攻する学生は、E S P 以前に E G P の学習を行なうことが望ましい。英語力が高くない学生が多いため、学習のプロセスにおいて適宜「足場作り」(scaffolding) を行うことが必要である。福祉の現場のコミュニケーションの基本は、対人コミュニケーションである。従って、医療関係等の専門用語よりも、まず通常の大人の日常会話で使用される表現を修得することが必要である。福祉の分野の E S P は、保育・幼児教育の場合と同様、E O P 中の E P P である。福祉には様々な分野があるが、特に介護福祉の分野で使用される表現を修得させておきたい。今後、わが国の福祉の現場ではアジアの国々からの職員が増えていくことが予想される。これからの福祉の分野で最も必要とされる技能は、会話能力及び片言でもいいからコミュニケーションを取ろうとする姿勢である。

以上、筆者が現在本務校において担当している全ての英語科目を紹介してきたが、教室内でのパフォーマンス、学業成績、「授業アンケート」結果等を総合すると、授業に対する意欲・積極性は、高い順に 1. 幼児教育学科、2. 福祉学科、3. 食物栄養学科、4. 専攻科食物栄養専攻 となる。もちろん、これは客観的な計算方法に基づくものではなく、飽くまでも筆者の目から見た総合評価である。但し、福祉学科の「英語」のみが選択科目なので、必修科目に戻した場合、ランキングの順位が変動する可能性もある。

最後に、本研究の考察全体を通して、資格系の短期大学の E S P の特徴として、以下の 7 つの点が挙げられる。

- ① 短期大学の資格系の学科にあつては、入学時から職業専門家を目指している学生が多いため E S P が適している。自分の専門分野で使う英語の表現を学ばせることは、学生の学習の「動機づけ」を高める上で効果的である。
- ② 短期大学の場合、文系の資格系学科には E O P 中の E P P が適している。これに対して理系の学科には、E O P と E A P の両方が必要とされる。
- ③ 専門分野あるいは学生の学力に応じて、適宜 E S P と E G P を組み合わせることが効果的である。福祉の分野では、E S P と E G P の比率をほぼ 1 対 1 にすることが適切である。
- ④ 短期大学においては英語の授業時間数が極端に少ないため、学習内容を厳選する必要がある。そのためには、ジャンルの典型的な教材を選定することが望ましい。
- ⑤ E S P の教材は、担当教員が独自のものを製作あるいは編集することが望ましい。
- ⑥ 学習プロセスの要所において教員が学習者に対して「足場作り」を行うことが効果的である。また、グループワークにおいては、お互いに協力し補助し合うことによって「学習者相互の足場作り」が自然に発生する場合もある。
- ⑦ 食物栄養学は理系分野であるが、工学、医学等の分野とは違って学生の E A P に対する関心が低い。キャリアに直結しないことが、その一因と考えられる。

以上の7点のうち、少なくとも⑤と⑥は、短大、大学、大学院等すべての教育機関のESP、そしてすべての分野のESPに当てはまるものと考えられる。何よりもESP教育で必要とされることは、1. 学習者をよく知ること、2. その学習者に対して手作りの教材を用意すること、3. 学習者の学習プロセスの要所において「足場作り」を行うことである。

保育士、幼稚園教諭二種免許、栄養士、介護福祉士の資格は2年間で取得可能であるため、全国の多くの短期大学において保育・幼児教育、食物栄養学、福祉の分野のESPのニーズがあることが想定される。しかし、少なくとも現時点においては、これらはESP研究の未開拓分野である。本研究が、わが国におけるESP研究の空白部分を補うことに少しでも役立てば幸いである。

(完)

<注>

- 1 福祉人材センター・バンク「福祉のお仕事」(Retrieved December 22, 2017, from <https://www.fukushi-work.jp/work/detail.html?id=5&did=1>)
- 2 ESP、EOP、EPPの区分に関しては、大学英語教育学会監修 英語教育学体系第4巻『21世紀のESP－新しいESP理論の構築と実践－』大修館書店 2010, pp. 7-8 参照。
- 3 「書きことば、あるいは話しことばの言語資料のデータベース。ジャンルの言語形式を分析するために、ソフトウェアを用いて検索ができる。」(『21世紀のESP－新しいESP理論の構築と実践－』p. 15)
- 4 West, R. (1994). 'Needs analysis in language teaching'. *Language Teaching*, Vol. 27, pp. 1-19.
- 5 佐野智子、大内善広、井上敏昭、所貞之、品田知美、広瀬美和、市口陽子、岩田泉 (2016)「福祉総合学部における英語教育の強化に関する予備的研究－英語教育の現状分析と保育英語導入の検討－」『城西国際大学紀要』第24巻第3号 pp. 29-30
- 6 *Ibid.*, pp. 17-28
- 7 Nakano, Yoko, Joan E. Gilbert, Eucharía Donnery(2009) "Needs Analysis for the Improvement of the English Curriculum for School of Human Welfare Studies: A Preliminary Study" *Human Welfare*, Vol. 1, No. 1, pp. 33-68.
- 8 清水雅子 (1999)「基礎教育課程における医学・医療英語教育の実践と課題－ESPとしての医学・医療英語教育－」川崎医療福祉学会誌 Vol. 9, No.1, pp. 25-32.
- 9 Clemenson, Tim, Nobuyo Tanaka, Yukiko Uematsu(2008) "Effectiveness of ESP Based Learning: Teaching Work Related English to Medical Secretary Studies Students" *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, Vol. 14, No. 1, pp. 40-41.
- 10 「就職や経済的成功など、何らかの実利的目的を達成しようとする態度」。これに対して、「統合的動機づけ」とは「第二言語社会やその文化に同化・統合しようとする態度」である。(小嶋英夫・尾関直子・廣森友人編集 (2010)『英語教育学体系第6巻 成長する英語学習者－学習者要因と自律学習－』大修館書店 p. 48) なお、「統合的動機」と「道具的動機」の詳細に関しては、Gardner, R. C. & Lambert, W. E. (1972) *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.を参照のこと。
- 11 Nakano, Yoko, Joan E. Gilbert, Eucharía Donnery(2009) "Needs Analysis for the Improvement of the English Curriculum for School of Human Welfare Studies: A Preliminary Study" *Human Welfare*, Vol. 1, No. 1, p. 47.
- 12 佐野智子、大内善広、井上敏昭、所貞之、品田知美、広瀬美和、市口陽子、岩田泉 (2016)「福祉総合学部における英語教育の強化に関する予備的研究－英語教育の現状分析と保育英語導入の検討－」『城西国際大学紀要』第24巻第3号 pp. 31-38
- 13 *Ibid.*, pp. 29-30.
- 14 厚生労働省ホームページ (Retrieved December 22, 2017, from http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/gaikokujin/other22/index.html)

- ¹⁵ Chamberlain, R. G. D. & M. K. S. Flanagan(1977) “Developing a Flexible ESP Programme Design” *English for Specific Purposes*, The British Council English Teaching Information Centre, pp. 36-56.
- ¹⁶ *Ibid.*, p. 45.
- ¹⁷ 富山短期大学では、各学科で開講されている授業科目の学習目標は、その学科の掲げる「教育方針」に基づいて設定されている。福祉学科の「能力基準別到達目標（学習成果）」は、次の5項目である：(LO1) 知識・理解：人間の多様な価値観、社会のしくみ、文化など、幅広い教養を身につけている。また、福祉の基礎理念、介護福祉、相談援助、福祉ビジネスなどに関する基礎的な知識を身につけている。(LO2) 技能：人間の尊厳とその人らしい自立した生活を支援するために必要な介護の技術・技能を身につけている。また、相談援助分野や福祉ビジネス分野に求められる基礎的な技能を身につけている。(LO3) 思考力・判断力・表現力：福祉分野の諸課題に対し、研究方法を用いて考察することができる。また、介護福祉分野や相談援助分野、福祉ビジネス分野で有効な思考・判断・表現の能力を身につけている。(LO4) 関心・意欲・態度：現代社会の動向に関心を向けることができる。自分で課題に取り組む力を身につけている。社会人、職業人として求められる自己効力感や自己肯定感を持つことができる。(LO5) 社会性・人間性：他者に共感でき、多様な価値観を受容する姿勢を身につけている。また、社会のルールの下、他者と強調、協働して行動することができる。教養科目「英語」の「学修成果」も、これらのうち、(LO1) 知識・理解、(LO4) 関心・意欲・態度 の2項目を踏まえて設定されている。
- ¹⁸ 石川英司、佐野潤一郎、大東真理、田嶋倫雄、C. S. Langham (2014) 『今を生きる ころとからだ』(*A Healthy Mind, Healthy Body*) 朝日出版社
- ¹⁹ 西村月満、関口章子、James W. Pagel、Joseph V. Dias (2001) 『英語で学ぶ医療と健康—新訂版』(*Health Care Today: The New Edition*) 朝日出版社 p. 24
- ²⁰ 近藤進、Gerald R. Gordon、吉岡みのり (2015) 『世界に見る医療と看護[新訂版]』(*Caregiver—New Edition—*) 朝日出版社 p. 16-17
- ²¹ 「この[「足場作り」の]概念は、認知心理学と L1 (第一言語) に関する研究に由来するものであるが、これは、社会的なやり取りの中で、ある知識のある参加者が言葉の手段によって初心者が参加できる支援の状況を作り出し、現在の技能・知識をさらに高いレベルに引き上げるものである。(This concept, which derives from cognitive psychology and L1(First language) research, states that in social interaction a knowledgeable participant can create, by means of speech, supportive conditions in which the novice can participate in, and extend, current skills and knowledge to higher levels of competence.)」(Donato, R. (1994) *Collective Scaffolding. Vytoskian Approaches to Second Language Research*. pp. 35-36 Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation, p. 40.) なお、“scaffolding” に関しては、「足場作り」以外に「足掛け」、「スキヤフオールディング」等の訳語が使用されている。
- ²² “humanitude” という語は、さらに歴史の古い“humanism” (「人間主義」) とは異なる概念を持つ。ジャッカードによれば、この語は「人類が自らを意識するようになって以来、幾世代にも渡って同胞に向けられてきた人間の才能・資質全体を意味するものであり、我々の進化を無限に豊かなものにし続けることができるものである (This term covers “the totality of the gifts of the evolution of man towards his fellows over generations ever since humanity became conscious of itself and which can continue to enrich our evolution without limit”)」(Albert Jacquard, *Cinq Milliards d’hommes dans un vaisseau*. Éditions du Seuil 1987)
- ²³ 永本義弘、町田純子、八木茂那子、Ian E. Ellsworth (2015) 『楽しい英語の世界へようこそ』(*Dear Class*) 南雲堂 p. 120
- ²⁴ 週間医学界新聞『優しさを、伝える技術。座談会・高齢者ケアメソッド「ユマニチュード」』2013年12月16日(第3056号)
- ²⁵ 本田美和子、イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ (2014) 『ユマニチュード入門』医学書院
- ²⁶ 「英語塾 Eddy 英語のことわざで英単語・英文法・英語表現を覚えよう」(Retrieved October 22, 2017, from <http://eigo-eddy-blog.seesaa.net/article/137165703.html>)
- ²⁷ 「多様なメンバーにより構成されたグループで、学生が協力して学ぶ時、理解を助けるために互いに弱点を補い合い、相手が必要としている補助を与えるということ」(山岸信義・高橋貞雄・鈴木政浩編集 (2010) 『英語教育学体系第 11 巻 英語授業デザイナー—学習空間づくりの教授法と実践—』大修館書店 p. 100) ただし、この著書における“peer scaffolding” の日本語訳は、「学習者相互の足場作り」ではなく「学習者相互の足掛け」である。また、教員が手助け・支援を行なう場合と、既に技能を身につけている学習者が手助け・支援を行なう場合の両方を「足場作り」(“scaffolding”) と呼ぶ場合もある。